Roe Head 時代の作品

——Charlotte Brontë の Juvenilia (6)——

和　知　誠之助

Roe Head の Miss Wooler の学校における生活は，束縛を極度に嫌い自由な想像の世界にのみ生きられる Emily に堪えられないものであったのみでなく，Charlotte にとっても苦しみの連続であった。抑えがたい創造への渇望と，それを罪悪視する宗教心との葛藤に苦しんだ彼女が，あるいは親友 Ellen Nussey に救いを切々と訴える手紙をつぎつぎと書き送ったり，あるいは秘かに日記の断片の中に，想像の世界にはせる思いと焦燥を書き綴ったことは，既に見て来た通りである。Charlotte にとってそれは現象的には Angria の世界からの隔絶に原因する苦しみであった。しかし根本的に見れば，それは少女が成人期に入ろうとする時の苦しみであったともいえよう。換言すれば夢からの脱皮であり，現実のきびしさの認識でもある。Charlotte は Roe Head 時代の苦しみを通って成長を促進される。幼い日々に夢みたかずかずの白昼夢によせる素朴な喜びにも，既に淡い影が次第にさし込んで来ていたが，Roe Head 時代に経験する現実は，単なる夢の中にのみ安住することを許さない人生のきびしさを彼女に暗示するのである。

わが家に定住する時とは違って，教師生活は Charlotte の心身両面に大きな制約を加え，そのために自由に想像力を働かせることは許されず，その不自由さに彼女はしばしば焦燥し苦しんだが，全く何も書かなかった訳ではない。この三年近くの教師生活の間にも，彼女は幾つかの散文と詩を残している。散文の物語として主なものは，*Passing Events* 〔*The History of Angria*. III.〕(April 21, 1836), *The Return of Zamorna* (December, 1836

or January, 1837), *Julia* (June 29, 1837), および *Mina Laury* (January 17, 1838) がある。その他に韻文としては "Zamorna's Exile" (July 19, 1836 and January 9, 1837) という575行および436行の長詩，その他数多くの詩などが残されている。これらの作品は幼い夢から脱皮した Charlotte の人間的成長に基づく芸術的展開を顕著に印づけている。

Passing Events.[1] これは1836年4月21日（木曜日）Charlotte の第20回目の誕生日に書き始められ8日後に書き終えられた。それは Easter の休暇で帰郷中のことである。久し振りに勤めから解放されて想像力をめぐらせる自由を得て却って思いが定まらないためか，彼女はあれこれと取りとめのないことから書き始める——

> Reader, as yet I have written nothing, I would fain fall into some regular strain of composition, but I cannot, my mind is like a prism full of colours but not of forms. A thousand tints are there brilliant and varied and if they would resolve into the shape of some flower or bird or gem, I could fling a picture before you; I feel I could. A panorama is round me whose scenes shift before I can at all fix their features.[2]

さまざまな色あざやかな情景を次ぎ次ぎと心に描き出す Charlotte の想像力は，W. Gérin が指摘しているように，「観念にではなく心象に依存する視覚的想像力」[3]であり，「彼女の叙述はそれ故知的事実となる前に視覚的で

---

1) この原稿（20,000語）は現在 New York の Pierpont Morgan Library に保存されている。*The Twelve Adventures* (ed. Clement Shorter, 1925) にその一部が "Mina Laury—I" の仮題で初めて公表され，次いで *The Shakespeare Head Brontë* (1938) に "The History of Angria: III" として全部が印刷され，更に *Five Novelettes* (ed. W. Gérin, 1971) では句読点などすべて原稿のままに発表された。

2) *Miscellaneous Writings* (Shakespeare Head Brontë 以下 SHB と略す), II, p. 129.

3) ‚Introduction' to "Passing Events" in *Five Novelettes*, p. 33.

あり，観察される実体というより夢想の性格を帯びている」[1]と言ってよかろう。こうした傾向はCharlotteの特性であって，*Jane Eyre*に見られるJaneの夢想と同種のものであることは既に見た通りである。[2]

こうして作者は先ず Ellrington Hall, 次には Waterloo Palace, 最後に Wellesley House の情景を思い描くが，結局最初の Ellrington Hall に思いを定めて，そこの Percy と Zenobia Ellrington との夫婦のいさかいから物語を始めて行く。やがて Mina Laury の Zamorna に対する深い愛情が描かれ，また Wellesley House に住む Mary に筆が運ばれる。彼女は父の Percy が夫 Zamorna の敵と結んで不穏な企みをこらしているとの風聞に心痛し，今は離婚されている Zamorna に秘かに会いに行きその愛撫を受ける。しかし Zamorna は Percy への怒りのために離婚を取消そうとはしないが，希望を失うなという Zamorna の言葉を僅かな慰めにして Mary は彼のもとを離れる。やがて Angria の軍隊が Percy を頭首とする叛乱軍に懐滅されたことを報じてこの物語は終る。

このように Zamorna と，彼を愛する二人の女性，Mina Laury および Mary Percy とのそれぞれの愛のすがたをこの物語は追求している。Mina がZamornaに対してひたむきな献身的な愛を捧げる一方，Mary も Zamorna に向って，"I am your creeping plant, I twine about you like ivy."[3]と深い愛情を語るが，同時に彼に叛逆する父 Percy と仲直りしてくれたらとの思いも禁ずることができず，夫と父との間の板ばさみに苦悩する。一方 Zamorna は Mina の奴隷的愛情を当然として受け入れ，Mary に対しても愛を捨てない。Percy への怒りのために Mary の離婚の解消は許そうとはしないが，希望を失わずに待っていれば，いつか月夜にひそかに訪れて抱いてやると伝えることも忘れない。この様子は月夜が嵐の夜に変えられという

1) *Ibid.*

2) 「Charlotte Brontë のJuvenilia (5)」,『甲南女子大学英文学研究』, 第9号, p. 35. を参照。

3) *Miscellaneous Writings*, II, p. 159.

変更はあるが，すこし後に書かれた *The Return of Zamorna* に描かれている。

Zamorna's Exile. Canto I.[1] Charlotte は Branwell からの手紙で Mary を死なせることにしたと報されて王妃の死をひとり思い嘆いたことは前回に述べたが，彼女は1836年7月19日に"And, when you left me, what thoughts had I then?" と Percy に呼びかける一行で始まる575行の長詩を書いた。これが *Zamorna's Exile* の仮題で知られるもので，その初めで追放の船上の Zamorna は Mary との結婚の日のことを想起し，自分のために死ぬというほど愛を捧げた Mary の美しい 'Ionian face' や 'Grecian brow'[2] をしのぶ。しかし Mary の父 Percy の叛逆に怒る彼は 'I'll break the father's heart by Mary's death'[3] と叫んで復讐を誓う。マルセーユを離れたところで思いがけずも花売娘に変装した Mina Laury を見つけた彼は，彼女に託していた息子の Gordon が殺されたことを聞き，狂気のように心休まることのない怒りと絶望にかられて復讐の怒りを高める。

この長詩は形式的には Byron が *Don Juan* に用いた八行詩体（*ottava rima*）を用いているが，形式のみでなく内容にも Byron の影響が極めて濃厚に出ている。自らを "A chained vulture, caged amid the sea"[4] にたとえる Zamorna は，放浪の Childe Harold の憂愁と Manfred の倦怠，苦悩，絶望をあわせ持つと共に復讐にかられる人間像となっている。それは当時まだ Roe Head にいわば幽閉の身となった Charlotte 自身の絶望的苦悩を写し出したものと考えられる。この詩を書いてから一カ月ほど後の8月11日の日記の断片にも，「これら四つの裸の壁の中に監禁され，この椅子に縛り付けられて来る日も来る日も坐っていなければならないのか」[5] と幽閉の身

1) 原稿は Bonnell Collection. *Legends of Angria* (1933) に収録 (pp. 111-129).
2) *Ibid.*, p. 114.
3) *Ibid.*, p. 115.
4) *Ibid.*, p. 126.
5) *Miscellaneous Writings* II, p. 255.

を嘆いている。

The Return of Zamorna.[1] 原稿には表題も製作の日付もないが，恐らく1836年12月か1837年1月に書かれたと推定されている。前の *Passing Events* と同じくこれも Charles Townshend が語り手という形を取っている。[2]

Zamorna の敗北，逮捕，追放から何週間も過ぎ，彼を乗せた Rover 号が大西洋で難破したとの報せがあり，その後消息が知れない秋の終り，Mary Percy が Alnwick の邸でやつれ果て，Zamorna を思って真珠のような涙を流すところからこの物語は始まる。やがて A. W. とだけ署名した手紙が届けられ，それに Zamorna が Rover 号難破の時乗っていなかったと記してあるのを見た Mary は絶望から明るい希望を取り戻す。やがて Zamorna の一隊は首都 Adrianopolis 奪還のため大進撃して首都に近づき，革命軍は敗北し，Percy は窮地におちいる。それを知った Mary は父の身を案じて苦しむが，それから程ない嵐の夜，かつて結婚前 Zamorna を迎えた廊下のことが思い出されて出かけて行くと，暗闇の中の背の高い男に激しく抱きしめられる。

Branwell の物語では Mary は既に死んだことになっており，Charlotte が *The Return of Zamorna* とほとんど同じ頃書いた長詩 *Zamorna's Exile.* Canto II. 〔"Well, the day's toils are over" で始まる436行の詩。January 9, 1837作〕[3] においても Mary は死んだものとされており，その長詩は Angria に帰った Zamorna が Mary を追慕する独白の形を取っている。これは Zamorna と Mary との再会を描く *The Return of Zamorna* に見られる Mary の取扱いと矛盾するが，Charlotte にとって Mary は，長い間想像力をかけめぐらせた女性で，深い愛着をもっており失うにしのび

1) 原稿は Law Collection に所蔵。Shakespeare Head Brontë で初めて公表された。*Miscellaneous Writings*, II, pp. 281-314.

2) 語り手，視点の問題については「*The Spell : An Extrvaganza* について—Charlotte Brontë の Juvenilia (4)—」(『甲南女子大学研究紀要』，第8号，Charles Townshend についてはその pp. 31-32を参照されたい。

3) 原稿は Bonneell Collection に所蔵。*Legends of Angria*, pp, 133-147 に収録。

ないので，再び取り上げることにしたのであろう。これ以後の Mary は以前の高慢さを失って Zamorna への愛に悩む女に変身して行く。

Mary の変貌のみでなく，Zamorna や Percy などの人間像も次第に異なった様相を示すようになる。この詩の最後で Zamorna は Alnwick 教会の墓地に横たわる Mary を思い嘆きにくれる。しかし彼のその悲傷感には，彼女の死がその父 Percy へ，Zamorna が憎しみと愛着との対立感情を奇妙に交錯させる Percy へ与える苦しみを喜ぶ心がまざっており，Zamorna に，Byron 的な複雑な人間像が加えられている。Charlotte は Branwell にひきずられて進めて来た Angria 王国の争乱のめまぐるしさに疲れ，かねてから最も関心を抱いていた人間関係，特に愛憎の諸局面に関心を集中するようになった。しかも Byron などの影響を受けながらも，自らが当面する現実の中に少女的夢では決して解決し得ない複雑さを見て，人間性のあるがままの美と醜を追求しようとする。現実認識の深化が彼女にリアリスティックな方向へ大きく前進させるのである。

1836年12月は四人のきょうだいに一つの転期となったようである。Emily と Anne も幼い時から兵隊人形をもとにした遊びを展開させ，Charlotte と Branwell との Angria とは別に，Gondal という仮空の世界に想像力をめぐらせていたが，この時期以前の原稿は何一つ発見されていない。僅かに残っている Emily の原稿のうちで最初のものは恐らくこの年の7月のものらしいが，この12月には 'High waving heather, 'neath stormy blasts bending' で始まる詩[1]を書いており，それには1836年12月13日の日付が記されており，その日は Charlotte と Anne がクリスマス休暇で帰郷する前日である。それは Emily もこの頃自らの創造力の具象化を意識に定着させ始めていたことを示していると考えてよかろう。

久し振りに Haworth に帰った Charlotte は弟妹たちの創造意欲に意を強くしたためか，12月29日に当時の桂冠詩人 Robert Southey に手紙を送って，

1) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (ed. C. W. Hatfield), p. 31.

女流作家としての見込みについて教えを乞っている。[1] この手紙は保存されていないので，その内容は正確には分らなくて，Southey からの返事によって推測されるのみである。その返事は休暇中の Haworth で鶴首して待つ Charlotte には屈かず彼女を悲しませたが，翌1837年3月に送られて来た。[2] Southey の返事が遅くなったのは，'disrespect' や 'indifference'[3] のためではなく，実は彼が長い間家を留守していたためであった。彼は，"You evidently possess, and in no considerable degree, what Wordsworth calls the 'faculty of verse.'"[4] と述べて Charlotte の才能を認めながらも，「あなたが習慣のように耽っている白日夢は病的な精神状態を引き起しそうです。そして日常のならわしがすべて平凡で無益に思われるようになるにつれてあなたはそれらに適さなくなり，その他の何かしかできなくなるでしょう」[5] と女性としての勤めに励むよう勧めている。また彼は「詩を書くのはそれ自身

---

1) これと同じ日 Ellen Nussey にも手紙を送って，前から期待していた彼女の来訪をことわっている。それは既に老齢の Tabby が折あしく転んで足を折り重態になったためである。Tabby はその後一家の手厚い看護で生命の危険を脱した。なお Mrs. Gaskell がこの手紙を1836年でなく1837年12月29日のものとしているのは誤まりであり，この間の *Life* の説明は訂正を要する。Clement Shorter もこの手紙を 1837 年のものとしており (*The Brontës, Life and Letters*, I, p. 144), Lawrence & E.M. Hanson の *The Four Brontës* (1949), Margaret Crompton の *Passionate Search* (1955), Charlotte Maurat の *The Brontës' Secret* (1969) も同じ誤まりを犯している。F. E. Ratchford さえも Tabby の事故を1837年12月のこととしているが，W. Gérin はこの手紙を，R. Southey に手紙を送ったのと同じ日に書かれたとしている。(See W. Gérin, *Charlotte Brontë*, p.109)。前後の手紙の内容から見て，1836年のものとしている SHB および W. Gérin の方が正しいと思われる。

2) これは Southey の子 the Rev. Charles Cuthbert Southey の編した *The Life and Correspondence of the late Robert Southey*, 6 vols, (Longman, Brown, Green and Longmans, 1850) に公表された。

3) *The Life and Letters*, I (SHB), p. 154.

4) *Ibid.*, p. 155. (Mrs. Gaskell, *op. cit.*, p. 124).

5) *Ibid.*, p. 155. (*Ibid.*, p. 125.)

のためにしなさい。賞讃を得ようと思わず有名になろうと目指さずに。それを目指すのが少なければ少ないほど，あなたはそれを得るにふさわしくなり，最後にはそれを獲得するでしょう」[1] と好意に満ちた忠告をしている。

これは当時の Charlotte にはまことに適切な忠告であって，彼女も Southey の忠告に深く感動し，この手紙の封の上に，'Southey's advice to be kept for ever. My twenty-first birthday. Roe Head, April 21, 1837'[2] と記しているが，その前の3月16日にも Southey に感謝の手紙を送っている。その中で彼女は，これまでも女性の果すべき義務を果すよう努めたが，教えたり縫い物をしている時に読書や創作をしたい思いに駆られたこともある，これからは忠告を無駄にしないように自分の気持を否定するし，自分の名が印刷されたのを見たい野心にかられるなら，Southey の手紙を見て抑える，と決意を述べて深い感謝を示している。[3]

Charlotte が Southey に手紙を送ったことに刺激されて Branwell も1月9日付で再び *Blackwood's* 誌の編集者に，また続いて1月19日には William Wordsworth あてに手紙を送っているが，いずれからも返事は来なかった。これに反して Charlotte が Southey あてに感謝の手紙を出したあと，Southey は3月22日付で再び Charlotte に手紙を送り，当時彼が住んでいた湖水地方の Keswick に来ることがあれば会いたいと歓迎の意を示している。[4] 彼はまた Caroline Bowles にあてて，Charlotte の手紙のことについて次のように書き送ったりしている——

> ... About the same time that she wrote to me her brother wrote to Wordsworth, who was disgusted with the letter, for it contained gross flattery and plenty of abuse of other poets, including me. I think well of the sister from her second letter, and probably she

1) *Ibid.*, p. 156. (*Ibid.*, p. 125)
2) *Ibid.*, p. 158.
3) Cf. Mrs. Gaskell, *op. cit.*, pp. 126-127.
4) Cf. *Ibid.*, pp. 127-128.

will think kindly of me as long as she lives.[1]

Charlotte の誠実さが Southey の心を動かしたのに反し，Branwell の高慢さが Wordsworth に苦々しい思いをさせたことは当然推測できることである。[2] またこの出来事が姉と弟とに与えた影響も対照的である。Branwell は返事を得られなかったことに反省することなく，その後ますます独善性を強め破滅の道へ陥って行くが，Charlotte は Southey の忠告通り，女性としてのつとめに励むと共に文学を文学自体を目的として書くことによって結局名声をも得ることができるようになる。Southey の二度目の手紙にある "Take care of over-excitement, and endeavour to keep a quiet mind."[3] という言葉も，当時の Charlotte にはまことに適切なものであり，彼女はその忠告を切実に感じ取り生かして行った。その後の作品にそれまでとは格段の落着きと成熟さが見られるのも，この手紙の件が大いに関係していると思われる。

Julia (June 29, 1837).[4] Douro 侯のいとこ Julia Wellesley は最初 *The Foundling* (1833) に登場し，その物語で Edward Sydney と結婚する。[5] 次に *My Angria and the Angrians* (1834) において，Lady Sydney としての彼女は親しい Lady Maria Percy へあてた手紙の中で，新しい首

1) *The Life and Letters*, I (SHB), pp. 156-157. 〔*Correspondence of Robert Southey with Caroline Bowles*. ed. Professor Dowden (Dublin, 1881)〕

2) Mrs. Gaskell は "… that he (Wordsworth) considered the (Branwell's) letter remarkable may, I think, be inferred both from its preservation, and its recurrence to his memory when the real name of Currer Bell was made known to the public." (*op. cit.*, p. 119) と述べて Wordsworth が好感をもったとしているが，これは Southey の言葉と照らし合わせるとまことに疑わしい。

3) *Ibid.*, p. 158. (Mrs. Gaskell, *op. cit.*, p. 128.)

4) 原稿は現在 Texas 大学の The Miriam Lutcher Stark Library に所蔵されている。M. Gérin がそれを判読して *Five Novelettes* (1971) に初めて公表した。

5) 拙稿「幻想と現実との相剋 —Charlotte Brontë の Juvenilia (3)—」，『甲南女子大学研究紀要』，第7号，pp. 73-74を参照されたい。

都 Adrianopolis へ向って Verdopolis から人々が争うように移り住むために Verdopolis が荒涼となり寂寥をかこっていると報じるなど，すこし登場するのみである。*The Scrap Book* に収められた "A Late Occurrence" (1835) では Julia と Sydney との離婚が取扱われる。この *Julia* においては彼女は Thornton 夫人として登場するが，ここでもごく簡単に扱われるのみであり[1]，彼女を中心人物とした纏まりある物語とはなっていない。

> There is, reader, a sort of pleasure, in sitting down to write, wholly unprovided with a subject. There now lie before me a quire of blank sheets which it is my intention to cover with manuscript, and not a word have I prepared for the occasion, not a scene, not an incident—yet somehow my feelings, far from being uneasy, are similar to those I have often experienced, when with a carpet bag ... I have mounted the Edwardston Mail ... & without aim or end allowed myself to be rattled away in the dawn of a June morning ...[2]

この書き出しは，前に見た *Passing Events* の最初の部分を思い出させる。Charlotte は何か書こうとする特定の題材をもって筆を取ったのではなく，多様な心象が心の中で浮き沈みするのを楽しんでいるようである。彼女は素材を批判的に選択する知性を働かせる前に，ばらばらに漫然と浮かび上がるさまざまな心象から出発する。ここに Juvenilia 時代における彼女の想像力の特性が窺われる。しかし次第に彼女も批判的構想力を身につけて芸術

---

1) Julia は *The Foundling* では "a rich dark satin robe ornamented with a profusion of jewels" を着て舞踏会に現われるが，この作でも "She had a satin robe on with lace sleeves." と描かれている。W. Gérin は，流行の世界から遠い片田舎に住んでいた Charlotte が，1830年代によく読まれていた *Forget-Me-Not, Friéndships' Offering* や Heath の *Book of Beauty* および *The Keepsake* などの雑誌をよく見ていたために Julia, Mary, Zenobia などの服装の描写ができたのであろうと推測している。(Cf. 'General Introduction' to *Five Novelettes*, p.15.)

2) *Five Novelettes*, p. 87.

家としての成熟を遂げて行ったことは論ずるまでもないが，この段階における Charlotte にはまだ未熟さがあったことは明白である。しかしまた同時に，十分に構想をめぐらせた後に筆を取るだけの時間的余裕も精神的余裕もなかったことが彼女の想像力の働らき方をその最も初期の形ではからずも露呈することになったと考えることもできる。その意味で *Passing Events* およびそれから一年二カ月後のまだ教師生活に縛られていた時に書かれたこの *Julia* の書き出しの部分は，Charlotte の想像力の特性をその原初の形で示している点で重要な意義をもつと言うことができよう。

またこの作には二人の新しい人物の登場が注目される。一人は Captain Henry Hastings で，彼は元来 Branwell の創造した人物であるが，Charlotte が取扱うようになると，彼は Branwell の特長をもつ人物として描かれ，特に Branwell の虚栄心，他のおだてに乗りやすい軽薄な性格が諷刺的に描き出されるようになる。後に詳細に触れようと思うが，1839年に書かれた *Captain Henry Hastings* においてこの人物は興味深く鋭い分析をされている。

もう一人の人物は Caroline Vernon である。この人物も，Charlotte の Juvenilia の中で芸術的に最も秀れたものとされている *Caroline Vernon* (1839)において女主人公としてすぐれた人間像を描き出されているので，後に詳細に見たいと思う。ここではただこの幼女の取扱いは *Villette* における Pauline Home を思い出させ，また彼女とパリの女優であるその母 Louisa Vernon との関係は，*Jane Eyre* における Adèle とオペラダンサーであるその母 Céline Varens の関係を連想させるということに触れるだけにしておこう。

Mina Laury (January 17, 1838)[1] 表現力において格段の進歩を印づけ

1) この原稿(18,000語)は現在 Mr. Robert H.Taylor が所蔵している。F.E. Ratchford の *Legends of Angria* に初めて公表されたが，W. Gérin の *Five Novelettes* (1971) では原稿を判読した通り，句読点などの修正，加筆をされずに印刷された。

ている秀れた作品であるこの物語は，クリスマス休暇で帰省中に書かれたもので，物語の最後に，"For a long space of time, good-bye, reader!" と記してあるのは，休暇が終って再び Roe Head に行かねばならない Charlotte の悲しみをもらしているように思われる。原稿には表題がつけられていないが，今は一般に，女主人公の名を取って表題とされている。

Mina Laury は，ウエリントン公の地所の森番をしていた Ned Laury の娘として身分低く生れたが，Zamorna に見出されて，その 'most faithful mistress' となり，Douro 侯（のちに Zamorna）と Marian Florence との間にできた Marquis of Almeida のうばとして最初 *Politics in Verdopolis* (1833)に登場する。彼女は *The Spell* (1834)においても nurse 兼 mistress の役を負わされている。その後 *Passing Events* (1836) および *Zamorna's Exile* (1836 and 1837) においても素朴な献身的愛を Zamorna に捧げる特異な女性となっているが，この物語においては献身的な愛が単なる素朴さを脱した激しさを帯びた痛ましい美しさを加えている。

この物語の主題は愛の諸相であり，Mina の Zamorna に捧げるひたむきな愛に，同じく Zamorna によせる Mary の激しい愛，Zamorna の Mina に対する冷やかさに対して Hartford 卿の Mina に対する炎のような恋慕が対照されている。Hartford 卿はかって，Mina と彼女が預っている Zamorna の子 Ernest Fitz-Arthur が敵に襲われ，Ernest は敵に奪われ Mina も危険な時，彼女を救った。彼はその折彼の腕の中で泣いて感謝した Mina のことが忘れられず，一月のある夜独り Zamorna の到来を待つ Mina を訪れて，愛を告白し結婚をせまる。しかし Mina は Zamorna への愛をたてに断乎として拒絶する。絶望的になった Hartford 卿は狂気のように Zamorna の馬車を止め，彼を殺しても Mina を手に入れると迫る。これを聞いて嫉妬にかられた Zamorna は Hartford 卿とピストルで決闘して重傷を負わせる。そして Mina を訪れた彼は彼女に，今までの愛情の報酬として Hartford 卿と結婚させてやろうと言って，彼女の愛情をためそうとする。飽きられたのかとの心痛で Mina は卒倒するが，やがて正気に戻った彼女に，Zamorna は

決して離さないと愛を語る。一方妻の Mary はその父 Percy の家に置きざりにされ，二三日したら迎えをよこすと言って去った Zamorna から何の消息もないので，不安に堪え切れなくなり，変装して Mina の邸を訪れて Zamorna に出会うが，うまく言いくるめられて帰される。Hartford 卿は重傷で生死の間をさまよっている中でも Mina への熱情を燃やし続ける。

以上がこの物語の概略である。Charlotte はこれまで Zamorna をめぐる種々な女性像を描き出したが，主なものは Percy と結婚する Zenobia Ellrington と Percy の娘で Zamorna の妃になる Mary である。前者は初め Zamorna に熱烈な愛を向けるが受け入れられず，Zamorna の友であると同時に敵である Percy の妻となり，後者は Zamorna と結ばれるが，父 Percy の叛逆のため離別されて悲嘆のうちに死ぬ。前者が "a noble creature both in mind and body, though full of the blackest defects: a flawed diamond;... a beautiful intellectual woman, but an infidel."[1] と評され，いわば「黒」のイメージをもつ女性であるのに反して，後者のイメージは「白」であり，"her beauty, good-nature, pride, reserve, cheerfulness, gaiety, freedom from sophistication, and elegant mind."[2] をたたえられる純潔さをもつ。Mary が "serene and proud"[3] と落ち着いた威厳をもつのに対して，前者は黒い炎のような情熱を燃やす。

両者のこのような対比にも拘らず，いずれも Percy と結びついている点からも考えられるように，互いに類似性をもっている。両者とも高貴な美しさに輝く高慢な女性であり，Zamorna への恋は，理由は異なるが，結局両者とも破綻を来す運命になる。この二人の女性と全く対照的なのが Mina Laury である。彼女の Zamorna に対する献身的な愛を Charlotte はまるで祈るかのように次から次へと描き続けている。

戦場の危険にさらされる中でも Mina は，"I do not care for being

1) "A Peep into a Picture Book," (*Miscellaneous Writings*, I, p. 358.)
2) "Politics in Verdopolis" (*The Brontës' Web of Childhood*, p. 73.)
3) "My Angria and the Angrians" (*Miscellaneous Writings*, II, p. 6.)

called a camp-follower. In peace and pleasure all the ladies in Africa would be at the Duke's beck; in War and suffering he shall not lack one poor peasant-girl."[1] と言って，苦難の中でこそ Zamorna に尽したいと願い，彼の愛撫をも「奴隷が君主の愛撫を受けるべきように」受けて，彼のなすままに従う。そして「主人が封建時代における忠誠さで従う臣下の中で最も美しく可愛いらしい臣下に与えるような真実で愛情こもる愛」[2] を与えられて，危険のない所に去るように命ぜられると，嫌々ながらも「命ある限り従順に」と答えて命令に従う。

Zamorna's Exile においては，Zamorna が Angria から追放されると，彼女はその後を追って，マルセイユから彼を送る船に変装して乗り込む。荒涼たる孤島に追放される敗残の身の Zamorna に付き添って逆境を慰めようとして危険を冒して来た Mina の姿を見た Zamorna は，深い感謝で心を打たれることもなく，次のように当然のこととして Mina の忠誠に応じる——

I cannot spurn her, though my wife is dying,
　Cheerless and desolate in solitude.
This moment, like a faithful dog she's lying
　Crouched at my feet, for with a sad, subdued,
Untiring constancy she's ever trying
　To gain one word, or even one look, imbued
With some slight touch of kindness. There, then, take
A brief caress for all thy labour's sake![3]

Mina は Zamorna の冷やかな取扱いに不平を感じることもなく，忠実な犬のように Zamorna の足下にうづくまり，短い愛撫を与えられるだけで満足する。「鷹が雲雀を愛するように」[4] 愛すると言う Zamorna の一瞬の苦しみをも除くためには死をもいとわない "faithful, devoted martyre"[5] が

1) *Passing Events*. (*Miscellaneous Writings*, II, p. 134.)
2) *Ibid.*, p. 137.
3) *Legends of Angria*, p. 121.
4), 5) *Ibid.*, p. 126.

Mina Laury である。

彼女は Zamorna から忠実な犬，あるいは臣下と見なされることにも何ら反撥を感じない。自らを彼の所有物とさえ思い，自らの全存在を Zamorna と結びつけている——

> ... Miss Laury belonged to the Duke of Zamorna. She was indisputably his property, as much as the Lodge of Rivaulx or the stately wood of Hawkscliffe, and in that light she considered herself. All his dealings with her had been on matters connected with the Duke, and she had ever shown an habitual, rooted, solemn devotedness to his interest which seemed to leave her hardly a thought for anything else in the world beside. She had but one idea——Zamorna! Zamorna! It had grown up with her, become a part of her nature. Absence, coldness, total neglect for long periods together went for nothing. She could no more feel alienation from him than she could from herself. ... It seemed as if she could have lived on the remembrance of what he had once been to her without asking for anything more.[1)]

ひたすらに Zamorna につくす Mina の無償の愛は彼から何も求めず，長い疎遠の後訪れた彼の冷たい唇で額に口づけされ，冷たい手で手を握られるだけで，長い遅延，労苦が充分に報われたとの幸福感に震えるのである。Zamorna が彼女の愛情をためそうとして Hartford 卿の妻にしてやると云うと，彼女は失神して卒倒する。彼女がやがて正気づくと，Zamorna は決して手離さないと変らぬ愛を示し，その証拠として Hartford 卿が彼女への愛を語ったことを怒って彼を射ったと告げる。それを聞いた Mina はその残

---

1) "Mina Laury," *Legends of Angria*, pp. 173-174. the Lodge of Rivaulx は Zamorna の狩猟小屋で Mina はそこにかくまわれていた。Hawkscliffe はその周辺の森の名。なお W. Gérin は，Charlotte のこの時期の風景描写は William Gilpin のスケッチに示唆を受け，彼の 'Cross of Rivaulx' を利用したと指摘している。Cf. *Charlotte Brontë*, p.118.

酷さに驚きながらも，恐怖よりも歓喜に胸をときめかす。Mina のその微妙な心理を Charlotte は次のように表現する——

> Miss Laury shuddered, but so dark and profound are the mysteries of human nature ever allying vice with virtue, that I fear this bloody proof of her master's love brought to her heart more rapture than horror. She said not a word, for now Zamorna's arms were again folded round her, and again he was soothing her to tranquility by endearments and caresses that far away removed all thought of the world, all past pangs of shame, all cold doubts, all weariness, all heart-sickness resulting from hope long deferred. He had told her that she was his first love, and now she felt tempted to believe that she was likewise his only love. Strong-minded beyond her sex, active, energetic, and accomplished in all other points of view, here she was as weak as a child. She lost her identity; her very life was swallowed up in that of another.[1)]

Zamorna は丁度 Byron のように，次々に違った女性に愛情を移すし，今の妃 Mary をも愛している。それを充分見て知っていながらも，Mina は自分だけが愛されているとの思いに誘われ，彼の愛に自らを完全に没し去る。意志強く活動的な Mina も，Zamorna の前では「赤ん坊のように弱い」のである。しかし彼女はむしろ強いと云った方がよかろう。彼女の熱情の激しさは Jane Eyre や Lucy Snowe の激情を予示している。Hartford 卿が彼女に Zamorna を捨てて自分の妻となるよう迫る時，彼女は断乎として拒絶し，Zamorna へのたとえようもない愛を語る——

> ... I have never in my life contradicted Zamorna, never delayed obedience to his commands. I could not. He was something more to me than a human being. He superseded all things—all affections, all interests, all fears or hopes or principles. Unconnected with him my mind would be a blank, cold, dead, susceptible only

1) *Ibid.*, p. 206.

of a sense of despair. How I should sicken if I were torn from him and thrown to you! Do not ask it; I would die first. No woman that ever loved my master could consent to leave him. There is nothing like him elsewhere. Hartford, if I were to be your wife, if Zamorna only looked at me, I should creep back like a slave to my former service. ...[1]

Mina が Zamorna は「自分にとって人間以上の何かであった」と言う時，それは *Wuthering Heights* において Catherine が Heathcliff との永続的一体性を叫ぶ次の言葉を思わせる。

...he(Heathcliff)'s more myself than I am. Whatever our souls are made of, his and mine are the same;...I *am* Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being. ...[2]

一体性を主張する激しさは両者に共通して見られるが，両者のあり方には大きな相異がある。Heathcliff は現実のすべての係累をも捨てて顧みない愛を追求するが，Catherine は，彼と結婚すれば二人は乞食になるだろうが，Linton と結婚すれば Heathcliff が世に立つのを助けられると考えて，彼から去る。これに反して Mina は不倫の愛であると自覚しながら，決して Zamorna を去ろうとしない。情熱と現実との争いは Emily にさえも大きな影を落しているようであり，Catherine のあり方は *Wuthering Heights* についての解釈を複雑にしているが，そこにこの不思議な作品を解く一つの鍵があるように思われる。

Zamorna と Mina との関係は決して対等の関係ではなく，一方が他を指配し，他はそれに従属するという特殊な関係である。これは Charlotte の作品に一貫して見られる教師対生徒の関係に類似している。生徒（女）にきびしい教師（男）が突然姿を消すが，再び現われると烈しく献身・服従を要求

1) *Ibid.*, p. 180.
2) *Wuthering Heights*, Ch. IX.

する。Rochester も Robert Moore も Paul Emanuel もそうした男性像である。こうした男の要求に女はつねに従順に応じて行く。これは結婚における男女の相互理解と平等性を絶対的要件として主張した Charlotte を思う時，何と解釈したらよいであろうか。

Charlotte はこの物語を書いて3年ばかり後 Ellen Nussey にあてた手紙の中で次のように述べている。

> ... if she ever loves so much that her husband's will is her law —and that she has got into a habit of watching his looks in order that she may anticipate his wishes she will soon be a neglected fool. ...[1)]

「夫の意志を法律と考え，夫の希望を予見できるように夫の顔色を見守る習慣になる」というのは，一見 Mina のあり方と似ているようであるが，決してそうではない。Mina は 'a neglected fool' ではない。ここでは Charlotte は男女の真の平等がきわめて困難であった当時において，女性の男性への盲従をいましめているのである。男の真価を知ることなく社会の慣習に従って盲従することをいましめているのであり，むしろ Mina のように Zamorna の真価を知った上で無償の愛を捧げる尊さを望んでいるのである。

Mina は Zamorna を愛し，「犬のように」従いさえする。それは彼女が Zamorna の本質——その傲慢な高貴さの中にひそむ欠陥をも含めて——を理解し，彼が彼女の愛を必要としていることを本能的に自覚しているからこそ，慣習，道徳をも越えて，ひたすらに愛するのであり，女は男に従うべしという社会的慣習に従って盲従するのとは根本的に相違している。

W. Gérin は Charlotte が理想とする男性像を次のように説明している——

> The originality of Charlotte's conception of the Ideal Lover—so opposite to that of her early Victorian contemporaries—lay

1) To Ellen Nussey, November 20, 1840.

in her acceptance of his imperfections. Superb as she had always pictured Zamorna in all the brilliance of his Regency regimentals, it was above all in his defects that he lived for her. These she had come to accept to the extent of preferring them to other men's virtues.[1)]

W. Gérin は，Charlotte の理想とする男性像は，男の不完全性の認識に基づくと解釈しているわけである。不完全性というのは人間性と云い換えてもよかろう。欠点のない男とは抽象であって実在ではない。Charlotte が愛し得るのは生きた男であり，欠点があるのは当然だと考えていたと言ってもよかろう。別の言い方をすれば，Charlotte の求める男性は，彼女に適した男であって，決して万人に適する男ではない。それがたとえ多くの欠点を持つ男であったとしても，彼女を理解し，必要とする男であり，彼女の方も共感できる男であればいい訳である。そうした男は，Zamorna のように，Rochester のように，また Paul Emanuel のように，傲慢で高圧的であるけれども，それらの欠点にもかかわらず，彼女という存在を認める限り彼女は愛を捧げて悔いないのである。外見的にはそれが奴隷的服従と見られようとも，それは決して盲従ではなく一体的融合なのである。Jane Eyre が Rochester から，"Jane suits me: do I suit her?" と問われて，"To the finest fibre of my nature, sir."[2)] と答えるように，こまかなこまかな点に至るまで心の奥底まで適合しているとの認識の上で初めて，Charlotte の愛は

---

1) W. Gérin, *Charlotte Brontë*, p. 131.

2) 柳五郎氏は，この「the finest fibre という潜勢語，また，象徴語とも言えるこの圧縮され，強く人の心をかきたてる言葉」は祖父 Hugh Bronte の作と言われる "Alice and Hugh" の最後の stanza に用いられた語であり，父から聞いて強く心を動かし，いつしか彼女自身の言葉になったものであろうと指摘した William Wright (*The Brontës in Ireland*, p. 112) の説を紹介している。そしてこの語が「心の奥底」「人間としてその深部にあるもの」を意味すると解釈されているのは興味深い。「ブロンティ姉妹の文体研究（ブロンティ姉妹の原点）（その1）」，愛知淑徳短期大学英文学会，ATHENA 第6号(1971)，pp. 4—5を参照されたい。

成立するのである。そこでは利害も打算も慣習も道徳もない。すべての規範を越えて男と女との絶対的融合が生れるのである。これが Mina を通して Charlotte が描こうとした愛であり，やがて Caroline Vernon に，更に Jane Eyre や Lucy Snowe へと展開して行くのである。

21才の Charlotte はこの時まだ現実の男性に対して愛情を抱いたことはなかった。それだけに彼女の愛の概念は純粋で高揚したものであり，現代的な新しさを思わせる。しかし他面では，その純粋な激しさは現実との対決によってやがて変質を来すことも止むを得なかった。その変質のあり方に Charlotte と Emily との違いがあって，*Jane Eyre* と *Wuthering Heights* との相異を来したと考えることもできよう。

ともあれ Mina の Zamorna に対する不倫ではあるが激しくひたむきな愛とその心情の微妙な動きの追求は驚くべきものである。Charlotte はこの物語において，Byron や Scott の模倣による，云わば少女趣味的な女性像を越えて，激情のなかにも苦悩をにじませた深みを女性像に与えて，女の愛の本質を追求している。換言すれば，ロマンの夢を捨ててあるがままに人間の実体を把握する方向へ動いている。これは Southey の忠告も大きく影響しているであろうし，彼女自身現実の重みをその細い身体一杯に痛切に感じ取らされて来たからでもあろう。

このような段階を経ることによって彼女の人間観は深まって行ったのであり，Jane Eyre や Lucy Snowe において到達した愛の純粋な激しさが意義深く理解されるのである。W. Gérin は，*Mina Laury* が雰囲気，描写力，洞察力および共感の面で，Charlotte のそれ以前のすべての作品に比し，重要な進歩を示しているとして次のように述べている——

> 'Mina Laury' is an almost faultless tale, imbued with a delicacy of feeling, an elegiac sweetness which she had not attained before. The fact is that with 'Mina Laury' Charlotte has done with juvenilia and emerges as an adult writer for the first time. That Charlotte herself recognized the change and felt the upsurge of

irresistible forces within her cannot be doubted.[1)]

女性像の鋭い描写と共に，これまでの大部分の作品に見られたような散漫な断片の寄せ集め的なものと違って，この作は小さいながらも一つの纏まりを見せているのも注目すべき点であり，W. Gérin のように，Charlotte はこの物語によって初めて「成人の作家」となったと言ってもよいであろう。

1837年夏の休暇中に Miss Wooler は，家の都合で学校を Roe Head から Dewsbury Moor にある 'Heald's House' と呼ぶ家に移した。Dewsbury Moor に移ってからも，Miss Wooler は，父の病気のため，しばしば学校を留守にしたため，Charlotte の責任は重くなり負担も大きくなった。

一方 Haworth の家にずっと住み続けていた Emily も自活の道を求めて，その秋 Miss Patchett の経営する Halifax の近くの学校へ，初めて教師として出かけて行った。10月2日付の Ellen Nussey への手紙の中で Charlotte は，「(妹からの手紙は) その勤務の様子を報せていますが，ぞっとするほど恐ろしいものです——朝6時から夜11時近くまでの重労働で，その間半時間運動が許されるだけです。これは奴隷の境遇です。妹は堪えられないのではないかと心配されます」[2)] と Emily のことで心痛している。Charlotte の不安通り，Emily の自活のための最初の試みは失敗し，Emily は6カ月ばかり勤めただけで再び Haworth に帰ることになる。

Charlotte の心労は自分自身のことの上に Emily にも及んだが，さらに

1) W. Gérin, *Charlotte Brontë*, pp. 117-118.

2) *The Life and Letters*, I (SHB), p. 162. (Mrs. Gaskell, *op. cit.*, p. 117). なお Mrs. Gaskell がこの手紙を1836年のものとしているのは誤まりである。さきに指摘したように Tabby の事故を報せた手紙の日付の誤まりと共に，この誤まりのため，Mrs. Gaskell のこの間の事情についての叙述が混乱している。従って Southey へ Charlotte が手紙を送って返事を待っていた時 (1837年1月) には，Emily はまだ Halifax の学校へ勤めに行っておらず，「シャーロットの手紙が目的地に着いたかどうかさえ知らずにエミリーはいやな勤めに帰って行かねばならなかった」(*op. cit.*, p. 119) という Mrs. Gaskell の言葉は明らかに間違いである。

一緒に Miss Wooler の学校にいる Anne にも広がることになった。二年以上も姉の傍で学んでいた Anne の風邪がこじれて症状が悪化したのである。亡くなった Maria や Elizabeth の場合を思い出して妹の容態を心配した Charlotte は，一時 Miss Wooler の冷淡さを怒って言い争うことなどもあったけれど，Miss Wooler の方から折れて出て和解を見た。しかし Charlotte は12月には Anne を故郷に連れて帰った。

Anne が Haworth で次第に健康を回復するのを見て Charlotte は安心したが，彼女自身は，Miss Wooler の懇願に応じて，翌1838年1月30日には再び Dewsbury Moor に赴き，その後5月23日まで教師生活を続けた。Miss Wooler への恩顧を感じてその懇願に屈した Charlotte ではあったが，彼女の忍耐の限度も極限に達していた。自己を犠牲にすることによって一家の将来への方途を切り開こうと最大限の努力を払ったにもかかわらず，あらゆる面において希望は崩れ落ちかけていた。Branwell への幻滅に加えて，Emily および Anne についての憂慮は，現実のあまりのきびしさに彼女を絶望に近い不安に陥し入れて行ったのである。再び帰って来た Dewsbury Moor の日々は彼女にとって，"the concentrated anguish of certain insufferable moments" であった。これは Charlotte が Dewsbury Moor を去って8年ほど後の1846年11月頃に Miss Wooler に送った手紙の中の一句であるが，彼女は当時の状態を回顧して次のように述べている。

> ... assuredly I can never forget the concentrated anguish of insufferable moments and the heavy gloom of many long hours —besides the preternatural horror which seemed to clothe existence and Nature—and which made life a continual waking Nightmare ...[1]

孤独と絶望のために悪夢にうなされ夢遊状態になる苦悩は，後に *Villette* において Lucy Snowe の中に痛ましく描き出されているが， Dewsbury

1) *Ibid.*, Vol. II, pp. 116-117.

Moor に再び帰った Charlotte は遂に心身共に正常さを失い，医師を必要とするほどの病いに倒れてしまった。そして医師からも，生命を大事にするなら故郷に帰るように言われ，1838年5月23日 Miss Wooler の学校での三年近い悲惨な教師生活を終えたのである。

SELECT BIBLIOGRAPHY

I. A Partial List of Charlotte Bronte's Juvenilia (3) (1835—May, 1838)

1835	
Dec. 19, 1835.	"We Wove a Web in Childhood." 185 lines plus 350 words.
1836	
Feb. 4, 1836.	'Well, here I am at Roe Head.' (Roe Head Journal) 1,400 words.
	'Now, as I have a little bit of time.' (Roe Head Journal). 416 words.
April 21, 1836.	*Passing Events.* By Charles Townshend. 20,000 words.
July 19, 1836.	"And when you left me, what thoughts had I then?" (*Zamorna's Exile*, Canto I). 575 lines.
December, 1836 (or January, 1837).	*The Return of Zamorna.* "Arranging in long-locked drawers, and shelves" (MEMEMTOS). 129 lines.
1837	
Jan. 9, 1837.	"Well, the day's toils are over." (*Zamorna's Exile*, Canto II). 436 lines.
January, 1837.	"Charge on the enemy". 16 lines.
May, 14, 1837.	"If thou be in a lonely place." (STANZAS). 48 lines.
May, 1837.	"This ring of gold, with one small curl" (THE RING). 142 lines.
May, 1837.	"No harp on earth can breathe a tone" (THE HARP). 15 lines.
May, 1837.	"She was alone that evening—and alone" (THE LONELY LADY). 71 lines.

May, 1837.	"Again I find myself alone, and ever" (MY DREAMS). 42 lines.
	"Dreaam of the West! the moor was wild." 36 lines.
	"When thou sleepest, lulled in night.' 102 lines.
May, 1837.	"He could not sleep!—the couch of war." 28 lines.
May, 1837.	"Look into thought and say what dost thou see" (DIVING). 12 lines.
May, 1837.	"I scarce would let that restless eye." 16 lines.
June 4, 1837.	"Is this my tomb, this humble stone." 80 lines.
June 29, 1837.	*Julia*. 15,000 words.
	"Why should we ever mourn as those" (THE PILGRIMAGE). 32 lines.
July 21, 1837.	"Oh, would I were the golden light" (WATCHING AND WISHING). 24 lines.
July 21, 1837.	"But a recollection now" (MARIAN). 51 lines.
November 17, 1837.	"A single word—a magic spring." 74 lines.
1838	
January 17, 1838.	*Mina Laury*. 18,000 words plus 14 lines.
January, 1838.	"Gods of the old mythology, arise in gloom and storm." 56 lines.
January, 1838.	"Long, ago—before the weight of pain." 24 lines.
January, 1838.	"What does she dream of, lingering all alone." 22 lines.
January, 1838.	"The voice of Lowood speaks subdued." 29 lines.
January, 1838.	"Oh, let me be alone,' he said" (THE DEATH OF LORD HARTFORD). 86 lines.
January 29, 1938.	"There's no use in weeping" (PARTING). 32 lines.
May 29, 1838.	"This last denial of my faith" (APOSTASY). 80 lines.

II. Printed Books

A. Primary Sources

1. *Legends of Angria*. Compiled by Fannie E. Ratchford with the collaboration of William Clyde De Vane. Yale University Press, 1933.
2. *Five Novelettes*. Transcribed from the original manuscript and edited by Winifred Gérin. The Folio Press, 1971.
3. *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick*

Branwell Brontë (The Shakespeare Head Brontë), 2 vols. 1938.

4. *The Poems of Charlotte Brontë and Patrick Branwell Brontë* (The Shakespeare Head Brontë), 1934.
5. *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence* (The Shakespeare Head Brontë), 4 vols., 1932.
6. *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*. Edited from the manuscript by C. W. Hatfield. Columbia University Press, 1941.

B. Secondary Sources.

1. Gérin, Winifred, *Charlotte Brontë: The Evolution of Genius*. Oxford, 1967.
2. Gérin, Winifred, *Branwell Brontë*, Thomas Nelson and Sons Ltd., 1961.
3. Lambert, Diane, *The Shaping Spirit: A Study of the Novels of Emily and Charlotte Brontë*. Stanford University: Unpublished dissertation, 1967.
4. Maurat, Charlotte, *The Brontës' Secret*. Translated from the French by Margaret Meldrum. Constable, 1969.
5. Ratchford,Fannie E., *The Brontës' Web of Childhood*. Columbia University Press, 1941.
6. Shapiro, Arnold, *A Study of the Development of Art and Ideas in Charlotte Brontë's Fiction*. Indiana University: Unpublished dissertation, 1965.